

2次機関用日本語教育のカリキュラム一試案

山内摩耶子
(塩崎日語スクール)

はじめに

日中国交回復後、中国帰国者の日本語教育は、各地のいろいろな教育機関の手探りの中から始まった。いまや10数年の歴史を持つ機関も少なくない。日本社会の中での生活者を対象とする教育機関として、2次機関は常にその時々 of 社会の影響を直截に受けずにはいられなかったが、生活保護受給や学習時間の減少など帰国者にとって生活面 / 学習面での厳しさが増す中で多様化した学習者にどう対応するかは、2次機関の深刻な問題である。多くの教師は構造シラバスによる日本語教育が帰国者には合わないことは、すでに感じてはいる。しかし捨て切れない。これはつまり学習者に合った教科書がないことに因る。しかし2次機関のこの悩みは多分解消されない。仮に地域の中でいくつかの機関が組織化され、ランク分けされた学習者をクラス単位のようにその1つを受け持つ形ができて、従来の教科書で成り立つクラスはそう多くないし、クラスの中の年齢 / 日本語既習歴 / ニ - ズなど、さまざまにある多様性に対応できるとは考えられない。結局、多少やり易いという程度の問題でしかない。

使用中の教科書に不満を感じ、教師はふたたび帰国者に合う良い教科書をと探す。しかし店頭にあるのが構造シラバスの教科書であれば、教科書を新しくし中を多少変えても、結局は帰国者には有効とは思えない「文型積み上げ方式」の採用が続く。こうして残留婦人の帰国とともに始まる3世をも含む日本語教育という、今迄の経験の外の一層の多様化が始まる時期を目の前に - 教育が今のような教室形式で行われる限り - 帰国者の日本語教育を「文型積み上げ方式」に頼らざるを得ない事態が続く、ということである。

中国帰国者には、第2言語としての日本語が学ばれる必要がある。その学習は、日本という異文化社会を知ること、日本人とのトラブルを回避したり解消したり出来る情報とり／情報伝えの表現形、生涯学習のための自学の方策、これらが総合的に身につくようなシラバスによって行なわれる必要がある^(注1)。しかしこのシラバスは、その内容を教室活動として体現させるための教科書をまだ持っていない。仕事の言葉の学習などJSL教育の個々に有用な教科書はある。しかし教育の相当部分を覆うことが出来る教科書としては『生活日本語』以上のものは多分出てこない。確かに教科書作りなど普通の教師の手には余る。しかし困っているなら困っている当事者が作るより仕方がない。今あるものの不足を補う形からでいい、現場での学習者の手応えが唯一の拠所でいい、作って行かなければならない。

とは言え教科書作りに先んじ、まずこのシラバスをどう教えるかの計画＝カリキュラムデザインが行われなければならない。つまり教科書とは、学習目標とその計画が明示され、「では学習活動を円滑に進めるための教材はどうあるべきか」が考えられる時、ようやく問題とされるものと言うことである。急がれる教科書作りである。しかし手順通りまず学習目標を立て、その達成のための教室活動を学習予定表という形にする。それを以下に示す。

．2次機関用のカリキュラムの作成

前期学習期間を1日150分 週5日(3か月 125時間)。30代～50代を学習者の主要メンバーとして設定、作成した。これは生活者としての帰国者には長い学習期間は期待できない、日中の教室としても働きながらの夜間学習としても、1日150分が限度と考えたことに因る。

- *学習目標：1 日本の生活習慣、日本人の考え方と行動パターンなど知る。
2 日常のあいさつ／会話が出来る。
3 どんな所でどんな書類が必要か知り、その書き込みが出来る。

上の目標を言葉としての学習項目として表すと、以下のようになる。

- 1ー生活の各場面で、あいさつが出来る。
- 2ー近所の人や職場で簡単な会話が出来る。
- 3ー住所、家族、趣味など自分の簡単な身近情報が伝えられる。
- 4ー会話の中の重要情報である語彙、特に「数」が聞き取れる。
- 5ーいろいろな書式が理解でき、書き込める。その場での目的行動の達成を助けるための表現形が使える。
- 6ー後期文型や会話を作り出せる最小限の文法が身に付く。

*前期（3か月12週）学習予定表：

月	火	水	木	金
会話	会話 「書く」	会話 聴解	その週の 文法文型	体験／実習 語彙の拡大

教育内容は、月曜日から金曜日まで内容に一貫性を持たせ構成される。帰国者が日本で生活するとき、かわりを持つことになる12種の場が選び出され、そこで必要とされる話す／書く／聞くの学習が行われる。「読」は読む「話」は話す、「聞」は聞くの学習によって得られると言う自明の理由から、4技能の習得が相互補完的に行われる。週の後半は文型の文法的確認と現場へ行っての実際確かめが行われる。

月曜日

会話 - 日常生活で遭遇する場面で必要とされる会話を場面シラバス^(注2)により学ぶ。(買物、〒局、区役所、病院、職場、近隣、子供の学校)

ここでの言葉は、ある場面で目的とする行動が達成されるのに「道具」として役立つべく学ばれる。しかし日本語力に限りがある学習者には、言語上の障害を乗り越える言語非言語ストラテジーが身に付くことが望ましく、学習した会話にストラテジーの表現を含ませて発展させた会話

が付加され、そこでストラテジーの手当がなされる。発展会話には、例えば「買物場面」では買った商品が傷んでいた／レシートの打ち間違いなどのクレームの言い方、商品の取り替え／返却の言い方なども含まれる。

火曜日

書く - 月曜日の場面と連携した場面で使われている書式の理解と、その書き込みの学習

EX 区役所での届け、病院診療申込、列車指定券申込、銀行での口座開き、自動振り替え申込、できれば祝儀不祝儀袋の書き方も。一度実物の袋に書き込み練習すればすむ。また区報や回覧板などの必要な箇所だけの読み取り方、学級だよりの読みと記入などでもできるだけ早期に学習させたい。

水曜日

聴解 - 月 / 火曜日の学習と連携しての重要情報の聞き取り。特に数に関する聞き取り。更にTVの天気予報やドラマの大まかな理解。

数の聞き取りは単純な数字だけの聞き取りから、語彙の重要情報の聞き取り練習同様、一文の中での聞き取りの形へと進む。重要情報の聞き取りも、語彙の一言半句の正確な聞き取りより、声の調子を含めて全体から大まかに判断する能力づけを目指す。

木曜日

その週の文法文型 - 週の前半の学習の中で使われていた文型で「文型」として取り上げられたものの理解と練習。および最も基礎的文法の学習。

その週に出た文型の理解・練習とは、銀行場面で「口座を作りたいんですが」が学習された後、その週七夕があり、みんなで短冊に中国語で願いを書

いて箆に吊るしたとしたら、その時、希望 / 希求の表現は日本語では「...たい」という言い方であり、作るには「動詞のます形+たい」の形と説明、既習動詞を使い、練習することを言う。

(付)このカリキュラムは文型積み上げ方式を採用していない。学習者が自分の思いに日本語で形を与えたがっているとき、その表現形を与えるだけである。12週その形で進む。ときには後期の文型とされるものが早々に出てくることもある。その文型を理解させるのは今は難しいと判断されれば中国語の対訳を与えるだけで、その週は通り過ぎる。その意味で月曜日の会話教材は中国語訳つきの『生活日本語』や所沢センタ - の教科書を使わせて頂き、作成できるといい。

この時、動詞の活用について理解 / 学習がされていなければ、この段階で行なわれる。つまりここで言う最も基礎的な文法の学習とは、動詞や形容詞の活用の規則を知っていれば、その規則を用いて他の場面表現ができる、などの言わば統語上の学習を言う。この意味で規則を知ること表現形が作り出せる最少限の文法事項は、別立てでも出来るだけ早く教えられる必要がある。アスペクトの一部も早く教えられれば学習者の言葉の世界は広がる。一方受身 / 使役の学習は5 W 1 Hの疑問詞や「いつ / どこで / だれが / なにをした」の語順に即しての作文学習より、後期の学習項目となる(注3)。

金曜日

実習 / 体験 - 会話学習した場面へ行き、見 / 聞き / 行動 / 話すなどのタスクをこなす。

仕事や病気などで休みの多い学習者にも、ぜひ来てほしい学習日である。その場の一般の日本人や級友の実習を見ているだけでもいい。指定券買い / 病院診療申込など簡単に実習機会が得られないものは、2・3か所見て回り、場毎に共通した配置を知るだけでも良い。若い学習者には出来るだけその場

でタスクを与える。年配学習者の実習は課題達成が目的とならざるを得ないが、若い人の実習では課題達成までの過程も評価の対象としたい。

語彙の拡大 - 生活に密着したカタカナ語を学ぶ。

表意文字でないカタカナ語は物や場と結びつける。例えばスーパーの折込み広告を使い、各自に意味を知りたい言葉を選ばせ、「すみません、カフェ・オ・レって何ですか」と、教師以外の日本人に聞く場を設ける。教師に聞くことは「練習」にすぎないが、一般の日本人とではたとえ未習語があっても本気で聞かなければならない。分からなければ、今迄に学習した方策を思いだし情報取りしなければならないかもしれない。学習者にとってその一時はほとんど「現実」となる。

次に後期カリキュラムを前期と同じ学習時間(3か月 125時間)で作成する。

- *学習目標：1 仕事の場での慣習/きまり、日本人の行動パターンを知る。
2 職場、子供の学校などで多少の話ができる。
3 後期学習目標とされた文法文型と表現形を学ぶ。
4 コミュニケーション・ストラテジの獲得。
5 漢字語彙の拡大

上の目標を言葉としての学習項目として表すと、以下ようになる。

- 1 - 近所/職場/子供の学校で、必要な「聞く話す」ができる。
- 2 - 未習の文法事項をできるだけ多く学び、言葉の世界を広げる。
- 3 - トラブルの回避や修復のための表現形が使える。
- 4 - 読み書き学習の下地作りと自学の方策を身に付ける。
- 5 - 漢語を音訓結び付けつつ、理解できる語を広げる。

*後期(3か月、12週)学習予定表：

月	火	水	木	金
会話	言う	書く	文法文型	漢語の拡大(b)
読む	聞く	漢語の拡大(a)		実習

前期学習がサバイバル日本語の習得を目的としていたのに対し、後期学習は「学び方を学ばせること」を主目標に設計される。

月曜日

会話 - 近隣や職場でのつきあいの為の会話（人の話の聞き方、自分の言いたいことが聞き入れられる話し方）、子供の学校でのやりとり。

前期のストラテジーの学習がある場面で課題達成の障害となったコミュニケーション・ブレイクを乗り越えるサバイバル的であったのに対し、後期は帰国者が発する側に立って行なう情報とり／情報伝えに際しコミュニケーション・ブレイクを乗り越えるための学習である。簡単なあいづち、前置き表現、婉曲表現、敬語など学習される。子供の学校でのやりとりは面接など一定のパターンに載せて行う。

読む - 短文の読解

練習した会話のシーンやその後の状況を文章化し教材とする。語彙などの説明なしに内容についてQ Aができる。要旨とりは自学に任せられることになる「読み」の学習の準備としても多く行ないたい。

火曜日

言う - 前日の短文読解に伴っての感想や意見を言う練習。

学習者によって内容が異なり、従って表現形も異なるが年配の学習者など互いに意見を出し合って、言いたい文型を出してくる。日本語力の差、中国での生活歴差が良い方に出るときである。またこの「言う」学習の中でも、言い換え／繰返しなどのコミュニケーション・ブレイク乗り越えのストラテジーを教え、使わせる。

聞く - （使用文型でなく）聞いて理解できればいい文型の学習。

紙芝居、ビデオ、時間帯が良ければ直接TVから。目からも情報を入れる。教師も共に見ながらメモをとり、事件や場の状況について聞く。古い日本映画は会話も状況もゆっくり進むので良い教材になる。敬語の学習にも良い。

水曜日

書く - 短文づくりに慣れる。

週前半の教材を使い、会話シ - ンを当事者や第3者になって作文。或いは事実と自分の感想と分けて書く練習など。最近の事件を取り上げ黒板にまず事実と感想を書かせ、別の学習者に事実描写を追加させる。どの学習者も文を続けるため慎重に前文を読み、正確に次を作文する。時には主語や時制の不一致を発見して前文の一部を書き直すなど活気づく。こうして簡単な起承転結文が作れるようになる。

漢語の拡大 - (a)

漢字圏の学生が日本の新聞を見て、「大体分かります」と言うのをしばしば耳にする。漢字は表意文字であるから、新聞の漢語だけ拾っても意味が取れるのは当然である。この漢語の拡大は中国帰国者にとって有利なこの点を活かしての学習である。まず漢字熟語 を与える。意味は一々教えない。分かるはずである（文化庁発行の『中国語と対応する漢語』などで意味が日中同じかどうかは確認しておく）。繰り返し読みを練習し、耳と声でその語を捉えさす。同音異義熟語 を与え、同様に目 声 / 耳の順で理解させる。教師はどちらかの漢語を構造の単純な文に入れ読み上げ、 ? ? どちらと聞く。

練習する漢語は上述の文化庁の指導書や高校の国語問題集、新聞など使えるが、使用中の教科書から摘出し、訓読みだけ提出の語に音読みを与えて練習すれば、一層学習が強化される。試みに初級日本語教科書『日本語初歩』で見ると、新出漢字は 380 字提出され、動詞に限っても 71 字(音訓で提出 27、訓のみ提出 44)と多い。しかし同音異語の組合せは道 / 動、帰 / 起、終 / 集など 7 組に過ぎない。この 7 組の漢字はいずれも造語性が高いとされるものであるから、例文が多く必要である。しかし必ずセットで練習する必要はない。時間数 / 学習者によってはむしろ混乱させることになる。この同音の 2 字漢語を辞書などから出し、短文をいくつも作るとは確かに大変な作業ではある。しかし 2 期以降はそっくり使えることを楽しみに、教科書と連携させて練習問題を作りたい。

(付)この同音異義語は外国人の日本語学習に関してより以前に、しばしば日本語という言語の問題点の1つのように言われるが、実際に抽出した同音異義語をある文の中に収めてみると、意味が取り違えられる危険性があるということは意外に少ない。(専門語を別にすれば)普通の日本人が文脈の中で判別できないほどあるはずがないことは、言語の持つコミュニケーションの機能から考えれば、当然のことではある。

上は漢語の拡大を教科書と連携させ、学習した語彙の一層の強化を計っているが、造語性に重点をおく/常用漢字という点に注目する/一定の語だけに使用度の高いものから教えるなど(注4)いずれも教育側のポリシー次第である。生活者としての一般教養的知識つけを視野に入れるなら、高校の社会科教科書が使える。この知識つけに読み教材としても有効である日本地理や経済関係の記述1~2頁に、漢字全てにルビを振り、その文をひたすら読ませる。文意は教える必要はない。文を構造的に単純な形に書き直すだけで十分である。次の日は同じ文の少しルビをはずしたものを与え、そして最終日にはやはり同一の文の、学習してほしい漢字熟語だけはルビを取り去った文を読ませる。これは同じ文をただ読むと言う単純な学習であるから、学習者に嫌気を起こさせないよう、毎日5分程度で終らせる必要があるし、学習してほしい漢字熟語も大量に設定しないほうがいいかもしれない。先の教科書と連携させた学習が(時には漢語の原義や意味の広がりに触れつつ)意味を通して漢語を増やす方法であるのに対し、これは多く読み、量から漢語の拡大を計る学習方法だからである。

(付)この学習は漢字圏の学生の壁、難しい漢字語(高級語彙)を目で見ても理解できるため、発音に関心を欠きがちとなることから、話されると理解できず、まして自分が話す段になると、基本的な和語しか出てこない=知的な会話は出来ないとする壁、を越えてもらうために行なうものである。読めれば

聞き取って理解できる道理である。帰国者は練習を重ね自分の声と耳で捉えた語を頭の中でそれに相当する漢字に直し...この壁を乗り越えて貰いたい。

木曜日

文法文型 - その週出た文法文型の整理と練習。初級文型とされているものでまだ未習の文型の学習。内容は前期の木曜日と同じ。

後期は学習日の1日を文法に終始しても(今まで文法で苦しめていないはずだから)学習者の文法アレルギー - は心配しなくてもいいと思われる。週前半の学習になくても必要なものは積極的に入れていく。

金曜日

漢語の拡大 - (b) それぞれの学習者が必要とする漢語(職場での語彙、職業訓練校用の語彙)。

日本語教室の勉強の中で、漢字の勉強が一番役に立った、あるいは(訓練校の)先生の日本語は単語、特に名詞を手がかりにして聞いている、と言う帰国者の声がある(注5)。日本語文では伝えられるべき情報は名詞が受け持ち、しかも伝達する必要がある重要情報は繰返し使われる和語ではなく使用範囲が限られる漢字語である、と言われる。この漢語が重要情報を担う日本語の性質上、職場用の漢語の学習は仕事の出来不出来に関係するだけに重要である。

訓練校用語彙はその職種の主として工具、材料名を形や場所と結びつけて。学習者の訓練校選択の巾は狭いので、何人かで同一の学習ができる。すでに仕事についている学習者は、職場に必要な語はすでに自学している。聞かれたものを教える形でよいと思われる。

金曜日は同一の語彙が学習されるとは限らず、内容も教師の手に余ることも考えられる。ここは先輩帰国者の力を借りる。後輩の役に立ちたいと考える帰国者は少なくない。先輩が12人いれば成り立つ。後期の12週、従って6か月に1回のボランティア教師である。夜間の教室などであれば十分な協力が得られる、と思われるし、仕事上の助言も貰える

はずである。

実習 - ワ - プロ、コピー - 機の扱いなど。

若い学習者にはワ - プロとマニュアルを1週間単位で貸し出す。マニュアルを読み、ほとんどの学習者が独力で操作を覚えてくる。(50音配列の古いワ - プロを貸し出し、教室ではロ - マ字配列のワ - プロを準備しても短時間で新しい機器に慣れる)。コピー機も種類が多い。いくつか練習させる。できればこれも手を出さず学習者に任せる。

. 円滑な教室活動のために

2次教育機関におけるシラバスを、カリキュラムとしてデザインすると上のようになった。ところで多くの現場では複数の教師によるチ - ム・ワ - クとして教室活動が進められている。2つの学習予定表に見るように、この活動は教師の緊密な連携の下に、行われる。従ってどの教師も、たえず教室の学習状況を把握していることが求められる。そこで現在の状況が全教師に共通に認識されるために、以下のもの(表1)を講師室の壁に貼る。

教師間で話し合い、この表に学習すべき表現形を先に書き出しておき、表現形を導入した日に日付けを書き入れる。教師は表を見れば何が既習/何が未習かが一目で分かる。たとえば「お大事に」は第1月の2週目と第2月の2週目に学習したことが分かる。これによりどの教師も、残りの未習文型を

表1 : 表現

前期 目標	あいさつ	お大事に 1/2 2/2	お元気でしたか
		お先に	失礼します
	数に関して	年月日	時間
		金額	番号
			助数詞

	文型	...てください ...たいです ...ので...ます 前置き表現(すみませんが よく分かりませんが) どうすればいいですか は？
--	----	---

含む教案づくりを心掛けるはずであるし、「て形」導入の翌日から直ちにフラッシュカードによる「て形」の口頭練習も始められる。「て形」は中高年学習者にとって最初の難所であり、上手に越えてもらうためには毎日合唱するしかない。また助数詞を含め、繰り返し教えても身に付かない表現形は何かも学期末教師会で書入れられた日付の回数を手がかりに知ることが出来る。

後期も前期同様の作業を行なう。学習目標に沿って表現文型を抽出し、表にして貼り出す。

表2：文法

前期	時制 ~て、~します 因果文 ~できます ~は~です た形 動詞の活用 い形容詞の活用
後期	~れる/られる ~そうです(伝聞) ~ながら~ます 副詞(とても ずいぶん ぜんぜん~ない)

表2も前期と後期の文法文型について、表1同様の作業の後、書き出し、導入された日を書き込んでいく。何を前期とし何を後期とするかは教師間で意見がまとまらないかもしれない。そのときは平均的な初級日本語教科書から抽出し、その提出順どおり表化する。一二期過ぎると、その現場に合った導入順がたぶん出来てくる。

表3：コミュニケーション・ストラテジー

情報取り文型	情報伝え文型
どうしてですか 1/4 2/1 ...ですね(重要語を繰り返し確認)	そうなんですか(不満の意を表明) ...じゃないでしょうか(婉曲 自説述べ)

壁に白い紙をはり、文型として学習された表現形を日付けを記して、書き入れていく。この表によって、「どうしてですか」という表現形は第1月4週目と第2月1週目に学習されたことが共通に認識されることになる。

表3は先に表現形を書き出さない。コミュニケーション・ストラテジー表現形とされるものは抽出できるが^(注6)そこに難易はなく、前期文型/後期文型と分ける必要はない。またコミュニケーション・ストラテジーの学習は、表現形の量を問題にしているものではなく、学習者がどんな文型を多用するかに個人差もある。従って書き出す必要もないと思われる。表3は学習者へのフィードバックと教師の反省 次期発展会話作成のためのものとなる。

この表1、2、3は、学期末に再検討を行なう。検討を重ねる内に、必要な学習項目が自然に導き出されてくる。たとえば多すぎる可能形、条件形、敬語をどう使用文型と理解文型に分けるかにも、あるいは地域によっては方言の扱いについても、教師の意見はまとまっていくはずである。検討に際し難しい論理付けは多分いらぬ。「これは学習者がいい表情を見せてくれた」と言う理由だけで多分いい。つまりその反応は「これが知りたかった/今日は良いこと聞いた/これ、使える」の謂いと言えるからである。

・ 学習者へのフィードバック

* 確認 :

このカリキュラムでは、何が学習されたか、授業が終らなければわからない。週の後半はその傾向が強い。従って授業の最後に学習したことの確認が必要になる。語彙については(初級日本語の語彙と文型については教育界でほぼ共通の認識があるから)平均的教科書から抽出し、中国語の対訳をつけ50音順の記載にし、その表を先に渡しておく。その日か週の終りに時間を取り、一緒に既習語を丸で囲む。また語彙表を渡す時、これがいわゆる初級語彙であることを言う。その機関で全て学習できなくても自学してくれること

を期待してである。

文型については習った順に各々ノートに日付とともに書き入れさす。そして学期末には、先の教科書から抽出した初級文型表とここで学習した文型を照合させ、一見無秩序に見えるこの教室活動でどれだけの文型が学習済みかを確かめさせる。大切な文法項目を落とされたままではないかと言う不安を学習者に抱かせないために必須である。

*評価：

普通行われるペーパーテストの外、どんなタスクをどう達成したかからも評価が行われる。筆答の卒業テストの結果は粗点でなく、ある基準から（EX 日本語4技能を項とした中国帰国学習者のテストの年令別平均値）見てどの位か、レーダーチャートなどの形で示すことが出来れば、年配学習者に無用な落ち込みをさせないで済む。若い学習者だけであれば、日本語能力検定試験3級 / 4級問題が学期末の総合的評価用に使える。採点から評価まで各人に任せる。語彙 / 聴解 / 文法の何が弱いかなど正確に報告してくれる。

・ 終りに

以上 J S L 教育のカリキュラム = 「どう教えるか」について考えた。すでに見たように、ここでは文型積み上げ方式は採用されなかった。提出順のあるものは統語上に限られている。この完成された「導入 定着」の積み重ねにより文法が体系的に習得される道を敢えて進まなかった理由は、構造シラバスが帰国者の日本語学習には適さないということと同時に、この方式の整然とした形のゆえに学習予定表もきっちりと組み立てられ、それが教師のフレキシブルな対応を規制し、結果的に「文型積み上げ」が目的化してしまうことを避けるためであった。

実際ここで必須としたものは、一般に初級で教えるべきとされている文法文型のうちの僅かである。あとの文型はその時々々の学習者次第である。それは終始一貫、学習してほしいのは生活習慣や日本人の考え方、日本社会の慣習などであり、しかしそれを抵抗無く学習して貰うために、2次機関が言葉

の教室としてあると言う理由から、4技能の学習の中に取り込んだ形にしているにすぎない。ただ「読み書き」については時間的制約のため、自学できる方策だけ身に付けて貰うこととし、またトラブル回避や解消の際の情報取り/情報伝えの表現形が、言葉に衣を着せる言葉と同じであったり自学チェックにも使えるということから、婉曲/前置き/敬語など教えることを求めているに過ぎない。

2次機関の日本語教育が構造シラバスに依拠することなく成り立つかどうか、現場での成功/失敗の経験を通し試みたこのカリキュラムは、案というより、これなら可能という報告に近い。つまり内からの声をどこまで一般化し得たかの理由付けに不足がある。ここに外からの見直しが課題として残された。しかし次の教科書作りも急がれている。ただこれは教材を集め練習問題を作り教室活動を行なう中で、教案の束として手元に残ったものをベースに作成できる。従って「教案の検討 カリキュラムの不備の発見 教科書の改善」の繰返しの中で、課題をこなして行く方法が取れると思われる。

注

- 1) このシラバスについては『中国帰国孤児定着促進セミナー-紀要』第2号投稿の拙稿 207 頁参照
- 2) 文化庁の『中国帰国者用日本語教育指導の手引き』54 頁参照
- 3) 受け身表現は1つの事柄(たとえばAがBを殴った)を仕手中心で説明するか/受け手中心で説明するかと言う、話者の心的態度が関わるものとして、その学習は帰国者にとっても重要である。しかし、山形県日本語学校長井分校の遠藤義孝先生の言われるように、当面「...状況を表現するのに受け身を使わなくてもいいわけ」である(『生活日本語(1)指導のための教案集』66 頁)ことから後期の学習項目とする。
- 4) ある語だけに使用度が高いものとは、必要の必、以上の以、～者、～機などを言うが、限られた語だけに使用度が高い漢字および造語性の高い漢字については、拓殖大学語学研究所の日本語教師養成講座での早稲田大学北条淳子教授配布の資料を使わせて頂いた。

- 5) 文化庁(1989) 『中国帰国者用日本語指導の手引き(仮称)職場対人接触場面調査報告書』 18頁、118頁
- 6) 『中国帰国孤児定着促進セミナー-紀要』第2号 219頁参照

参考資料

- 1) 樺島忠夫(1988) 『日本語はどう変わるか-語彙と文字-』岩波新書
- 2) 鈴木孝夫(1990) 『日本語と外国語』岩波新書
- 3) 田中望・斎藤里美(1993) 『日本語教育の理論と実際-学習支援システムの開発-』大修館
- 4) 肥田野直(1989) 『心理・教育における測定法』放送大学教育振興会
- 5) 文化庁文化語課(1989) 『中国帰国者用日本語指導の手引き(仮称)職場対人接触場面調査報告書』
- 6) 同上 (1994) 『異文化理解のための日本語教育Q A』
- 7) 同上 (1994) 『外国に「ジ」関係者のための日本語教育Q A』
- 8) 山形県日本語学校長井分校(1992) 『「生活日本語」(1)指導のための教案集』山形中国帰国者自立研修センター
- 9) 横山信子(1992) 『外国人労働者のにほんご会話(日本語・中国語・ポルトガル語・スペイン語)』三脩社